慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	津村秀松著 国民経済学原論
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.10 (1914. 12) ,p.1359(131)- 1360(132)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19141201-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

採れるの事實、二は前者の執筆者十六名は悉く帝大出身又は帝大教授なるに反し、後者の執筆者中八名は帝國大學とは直接の緣故を有せざるの事實是れなりとす。此比較は勿論內容の價値其物の比較とは全く別問題なるも、論題の統一と執筆者の數の多きのみならず廣く學界諸方面の代表者を網羅せることとは和田垣博士紀念論叢の特徵と看做す可きものならんか。

本論叢に載せたる二十八篇の論文中二十四篇は邦文なるも他の四篇は外國文なり。其中一は添田博士の英文、二は山內法學士並に松崎博士の獨文、他は矢作博士の佛文なりとす。斯くの如く四篇の外國文を載せたる點に於て本書は千九百八年出版せられたるシュモラー氏古稀祝典紀念論文集（Die Entwicklung der deutschen Volkswirtschaftslehre im neunzehnten Jahrhundert）と對比す可きか。此シュ氏紀念論文集に載せたる四十篇の論文中三十七篇は獨逸文なるも他の

三篇は外國文なり（英、佛、伊各一篇）。

本書は斯くの如く二十八名の筆に成る二十八篇の論文を載せたるものなるを以て、一々其內容を紹介することは本誌の餘白の許さゞる所なり。然りと雖も、其執筆者の多くは學界屈指の學者にして、其論文も概ね眞面目の研究の成果なることは特筆するの要ある可し。又、一二の例外を除けば、各論文の論題、叙述の體裁並に夫れに顯はれたる研究方法は能く各其執筆者の特徵を瀝示せりと云ふも蓋し誣言に非ざる可し。されば、一度び本書を繙かば、多くの著書を涉獵することなくして、多數の學者が如何なる方法を以て如何なる問題を研究しつゝあるやを察知すること得るならん。

本論叢は和田垣博士の在職二十五年を紀念する爲めに編纂されたるものなるも、此編纂其物も何等かの方法を以て紀念せらる可き事業なりと謂つ可きか。されば、和田垣博士の名望を欽仰し此祝典を慶賀する人士は云ふ迄もなく苟くも經濟學其物に趣味を有る者は皆此論叢を繙かざる可からず。

終りに臨んで編纂委員諸氏の絕大なる努力の結果遂に本書が上梓せらるゝに至りしことを祝し、併せて諸氏の奮勵に對して深き謝意を表せんと欲す。

津村秀松著『前正增補』國民經濟學原論』上卷

大正三年十月寶文館發行
菊版五百九十頁定價金貳圓四拾錢

本書の初版は明治四十年中に上梓せられたるが其完備せる體裁と流暢なる文體とは大に讀書界の歡迎する所となりて、忽ち數版を重ねたり。邦人自身の手に成る經濟原論中に於ては本書は蓋し最も廣く世に行はれたるものなる可し。從つて世に既に定評ある本書の內容を更に此處に於て紹介するの必要を認めざるも此回著者が訂正增補を施して再び出版せる本書と舊書との相違に就きて一言せん。

此上卷と舊版の上卷とを全篇に亘りて比較せるにはあらねど、概して言はゞ、新版は各章各節に於て訂正を加へられたるの形跡を存せり。其の主なるものを擧ぐれば新統計の利用、舊書上梓以後に於ける新學說殊に我國の學者に依りて唱へらるるものを引用せること、重要ならざる註解を省略して通讀に便ならしめたること、概念の用語の統一、推理の立證を助くる爲め輓近に於ける經濟事情を擧げたること等なる可し。

概して之を論ぜば、新上卷は舊上卷に比して推敲の跡一層歷然たるものありと謂ふ可し。著書の絕倫の勢力を以てし初めて能く一著述を斯く迄思ひ切つて訂正することを得るなれと思はるゝ所尠なからず。吾人は未だ本書下卷の新版に接せざれども、下卷も上卷と均しく改善せられたるものなる可しと信ず。

終りに、吾人は本書の再生を祝すると同時に舊版に倍して紙價を高むるに至ら可きことを疑はず。